

鎌倉時代の神将形像の構造技法から見る制作工程に関する検証 一本山慈恩寺十二神将像のうち寅神将像の模刻制作を通して

東京藝術大学大学院美術研究科
文化財保存学専攻保存修復彫刻領域（彫刻）
金 路 1322933

論文内容の要旨

現在、山形県寒河江市本山慈恩寺薬師堂に安置されている十二神将像は、正確な制作年代は伝わっていないものの、その造形の特徴や表面彩色技法から、鎌倉時代作8躯と江戸時代作4躯に分類された。この十二神将群像は、生動感あふれる表情と誇張されたダイナミックな表現によって、日本中世以降の神将形像における傑作として広く知られてきた。

昭和58年度から62年度にかけて、公益財団法人美術院国宝修理所による解体修理が行われ、その過程で本群像のうち寅神将像と卯神将像に、腰部が切断されているという特異な構造が確認された。この胴切りという制作技法は、広く普及したものではないものの、日本の木彫像においては散見される。従来の研究においては、この技法は仏師が制作過程において仏像全体の姿勢を調整する手段として用いられたと推測されてきたが、その具体的な調整過程に関する研究は未だ乏しいのが現状であった。

本研究は、本山慈恩寺十二神将像を対象に、複数回の撮影調査、透過X線写真撮影、3Dデータ計測といった多様な手法を用いて詳細な調査を実施した。3Dソフトウェアを活用して寅神将像の制作過程を検証・推測するとともに、構造が最も複雑な寅神将像を、可能な限り原像と同一の寸法、技法、構造で木彫模刻制作することで、その制作技法を実証的に解明することを試みた。さらに、調査の結果に基づき、十二神将像の造形と構造における類似点と相違点を比較検討することで、各仏師の制作習慣を分析し、群像制作に関わった仏師の人数を推測する。

第一章では、研究対象とする慈恩寺十二神将像の調査結果を提示した。造型、構造などの基本情報を詳細に記録し、寅神将像が他の神将像に比べて圧倒的に複雑な構造を持つことを明らかにした。

第二章では、模刻対象である寅神将像の制作過程と、その特異な構造の要因を探った。各別材の位置を考察し、それぞれの役割を推定することで、各部材が寅神将像の全体的な動勢にどのように関与しているかを検証した。その結果、仏師が制作過程において、寅神将像全体のバランスを考慮し、像の動態を繰り返し調整していた過程を推測することができた。

第三章では、透過X線写真の分析および模刻を通して得られた知見に基づき、それぞれの構造の詳細と目的について考察した。そのうち、仏師による材木の割り方と別材の寄せ方に着目し、仏師が仏像の造形と空間表現を追求していた点を明らかにした。

第四章では、十二神将像の細部造形および内割りを比較し分析した。顔、耳、髪、足部などの細部における差異を丁寧に検証し、異なる作者による制作を示唆した。特に、顔の左右非対称性、耳の形、対耳珠の有無、髪の彫法、足部の表現など多角的な比較を通して、少なくとも6名の作者が関与した可能性を推定した。

結論として、本論文は制作者の視点から、慈恩寺十二神将像の細部特徴に注目し、複数の仏師による造形理解と制作習慣の違いを考察した。群像全体の芸術的統一性を維持しつつ、各仏師の個性的な特徴を分析することで、群像制作における計画性と、制作に関与した仏師の人数を推定した。さらに、寅神将像の構造分析を通して、動態調整前の姿とその過程を推測した。他の仏像と比較してより誇張された寅神将像の上下半身の動勢は、仏師が材料特性と卓越した木彫技術を駆使することで実現されており、仏像制作と表現の自由度を高めている。この誇張された様式は、造形表面にのみ表れているのではなく、従来に例が少なく、その後もほとんど採用されなかった内部構造にこそ凝縮されており、鎌倉時代の仏師による造形表現における積極的な試みを如実に示している。